

Mrs. Dalloway 試論

—Clarissa という女について—

北 田 敬 子

序 1922年の Virginia Woolf

Virginia Woolf と James Joyce は共に1882年に生まれ1941年に死んだ。文字通りの〈同時代人〉である。

〈同時代人〉という言葉はそれだけで既に二人の作家が何か共通の要素を持っていることを仄めかすようではあるけれども、Woolf と Joyce を安易にひと括りにすることは危険である。もとより二人の文学的立脚地点は大いに異なる。片やロンドンの知的上流家庭に育ち、ブルームズベリーグループに象徴されるイギリスの文化的ラディカルの中で洗練され、創作のみならず評論や出版事業にも力を注いだ Woolf。一方、当時イギリスの統治下にあったアイルランドの首都ダブリンに、没落地主の長男として育ち、成人するかしないかのうちに故国を捨ててヨーロッパを転々としながら、生涯独自の言語世界の構築に励んだ Joyce。二人は実際に会うことも無かったし、文通をした形跡も無い。だが、同じひとつの時代を生きた者どうし、全く無縁のまますれ違って終った訳ではない。殊に Woolf は Joyce の存在と仕事を強く意識した記録を残している。

1920年、Woolf は *Jacob's Room* を書き淀みながら、「でも私は私のやっているしごとを、ジョイス氏がもっとうまくやっているのだろうと考えた」⁽¹⁾と日記に書きつける。当時 Joyce の *Ulysses* は *The Egoist* および *The Little Review* 誌上に分載され、既に「猥褻」の咎で差し押さえ、裁判、発禁の運命を辿り始めていた。⁽²⁾ Woolf が「もっとうまく」という時、それは *A Portrait of the Artist as a Young Man* 以降全面開花を始めた「意識の流れ」手法にまつわる、人間の内的真実の表現を指すものであることにまちがいない。Woolf は Joyce の力量を認識しつつ、彼女自身の方法を編み出すことに精根傾けて、今まさに一連の実験的小説を産み出そうとしているところであった。*Jacob's Room* が出版されたのは、*Ulysses* がパリの Shakespeare and Company 書店から単行本になって出版されたのと同じ1922年のことである。

Ulysses の最初の出版が難航したことはよく知られている。難解で猥雑で奇態なその作品を引き受ける英語圏の出版社は逐に現れなかった。Woolf 夫妻の経営する The Hogarth Press も *Ulysses* を拒絶した会社のひとつである。Joyce の後援者 Weaver 女史が持ち込んだ原稿を Woolf

は実際に手にしている。その時の彼女の率直な印象は思い出として Woolf の最晩年の日記にこう記されている。

これを出版するために私たちの生涯をささげようか。あの下品なページはとてもふさわしくないように見えた。……原稿のどのページも野卑なことでめまいがするようだった。私は象眼細工のしてある戸棚のひき出しにそれを入れておいた。ある日のことキャサリン・マンズフィールドが来たので、私はそれを取り出した。彼女はバカにしながらそれを読み始めた。それからとつぜん言った。でもこれには何かがあるわ、文学史の中に残るように私には思われる光景が、と。彼はその辺にいたのだけれど私は彼に会ったためしはなかった。〈1/15 (水) 1941〉 (p. 515)

この記述について、トム (T.S. Eliot) が如何に *Ulysses* に熱狂したかが記され、Woolf は自分も出版成ったその本をひと夏かけて読み通したことを回想している。しかし Woolf は、世の紳士達が絶賛するようになった Joyce の「傑作」に対して終生全面的な同意を捧げるわけにはゆかなかったのである。

日記を再び溯って1922年の夏の記述に戻ると、Woolf のどの評論にも見当たらない激しい嫌悪の情が、唾棄すべき調子で *Ulysses* にぶつけられているところと我々は出会う。

私は今までに 200 ページ読んだ……。初めの二、三章によっておもしろさ、刺激、興味を与えられた——墓地の光景の終りのところまで。そのあとは内気な大学生がにきびをつぶしているような工合で、退屈し、いらいらし、幻滅した。そしてトム、かの偉大なトムはこの小説が『戦争と平和』と同等のものだと思っている！ 私には文盲の、下品な本のように思われる。独学した労働者の本だ。彼らがどんなに自己中心的で、自己主張的で、未熟で、人をぎょっとさせ、結局はむかむかさせるものか、私たちはみな知っている。料理した肉を食べられるのに、どうしてなまの[・][・]を食べなくてはならないのか。〈8/16 (水) 1922〉 (p. 68)

Woolf の直観には正しいものと、危いものの両方が交じっている。下品な本ということ——確かに上品な本ではない。だが人間の営為の如何なる局面、細部にも目隠しをせず、一切を同等の扱いで周到に書き尽す、という創作態度で伝統的価値観の束縛から離れた Joyce に対して、Woolf はひどく不寛容である。また、Joyce は「独学した労働者」では全くないものの、「自己中心的で自己主張的で」、「人をぎょっとさせる」ことは嘘ではない。*Ulysses* が「生肉」だという比喻は、その当否よりも Woolf の生理的拒否反応の表現として一層興味深い。

更に9月6日付の日記で Woolf は *Ulysses* に対してはっきりと異議申し立てを行う。

Ulysses を読了したが、これは不発の作だと思う。これには天才があるとは思う。だけど価値の低いものだ。この本は散漫だ。不快な感じだ。気どっている。明白な意味だけでなく、文学的な意味でも下品だ。第一級の作家は書くということにあまりにも敬意の念を持っているので策を弄したりしない、と私は言いたい。人をびっくりさせたり、離れわざをしたりはしないものだ。これを読んでいるあいだじゅう私は学校の寮にいる青二歳を思い浮べた。才気と能力は充分あるのだが、自意識過剰で自己中心的であるため、気が変になって、とんでもないことをやらかし、気どってさわぎたて、落ちつきがなく、善意の人たちは彼を気の毒に思い、きびしい人たちはただ迷惑する。彼が成長してこんなふうでなくなるのが期待される。でもジョイスは40歳なのだから、これはあまりありそうもないことだ。私は注意深くこの本を読んだわけではなく、ただ一回読んだだけ。とてもわかりにくい本だ。だからきつとこの本のよさを、不公平にみくびったのかもしれない……彼をトルストイと比較するなんて全くばかげていることだ。〈8/6 (水) 1922〉 (p. 71)

この記述の中には Woolf の頑なまでの拒否反応と、同時に自分の判断に対する微かな自信の無さが読みとれる。むろん我々はこれが公表を前提とした評論ではなく、理性以上に感情の吐露を許す日記に書かれたものであることを充分考慮に入れた上で読み解かねばならない。また、Woolf は *Ulysses* の数少ない最初の女性読者の一人であったこと、この記述の段階では *Ulysses* をめぐる如何なる評論、解説、注釈の類も世に出てはいなかったことも銘記しなくてはならない。Woolf は一般読者^{コモンリーダー}として、果敢にも素手で *Ulysses* を相手にしたのである。自分自身も40歳である彼女が、同じ40歳の男性に対して、成長する見込みの無い青二歳呼ばわりをするとところは苦笑を禁じ得ないとしても、Joyce の「自意識過剰」、「自己中心的態度」に対して Woolf の示す不快感は一貫したものであるだけに見過ごすことはできない。評論の中で Woolf の行う Joyce 評価ははるかに冷静なものであるが、⁹⁾ 最初に働いた彼女のこの直観的批判は変化しない。Woolf は自らも「意識の流れ」手法を応用した内面描写を行いながら、「自意識過剰」を排し続けたのである。

このような日記の書かれた頃、Woolf は出版したばかりの *Jacob's Room* の評判に一喜一憂し、同時に次作 *Mrs. Dalloway* の構想に心を奪われていた。前者が実験的な作品であることは言うまでもない。しかし彼女の実験は未だ端緒についたばかりであり、Woolf 自身その欠点や不完全性は十分に意識していた。*Mrs. Dalloway* では *Jacob's Room* を覆う曖昧さや散漫さが排除されて、はるかに明瞭に人間の姿が浮かび上がることになる。1922年の夏、Woolf は模索しており、

呻吟していた。そして *Ulysses* に激しく刺激され、挑発されていたことも明らかである。「まの肉」ではなくて「料理した肉」を読者に差し出す為の技を会得したがっていたはずである。だから、例えば Eliot が絶賛した⁽⁴⁾ *Ulysses* 最後の章に於ける Molly Bloom の内的独白——それは性の夢を中心、女性の肉体をことばに転化したとも言うべき、内容、形式共に比類無い断章である——を読み了えた時、Woolf が同時代の男性読者達のように、Molly の大なる肯定のつぶやき “Yes”⁽⁶⁾ にそう易々と魅了されなかったであろうことも想像に難くない。Woolf は独自の女性像を産み出す準備をしていた。人間の内的真実というものを、同い年の男性作家が行ったのとは全く別の形でことばに結実させる方法を熟成させようとしていたのである。以下、その手法を検討してゆくことにする。

§1 時空の座標の中で

Jacob's Room では、まだ時間は流れていた。すなわち、初めには幼児の Jacob がおり、やがて彼はケンブリッジの学生となり、いつしかロンドンに部屋を構え、大陸に旅して、ついで大戦に命を散らす。決してこれが伝統的な形で一人の青年の成長を物語る教養小説^{ビルドゥングスroman}ではないにしても、断片的情景、数多くの人間達、あるいは Jacob の思索と行動等一切の基軸を成し、多岐に亘る描写の分散を防いでいるのは彼の人生の時間軸だといえよう。一方の極（誕生）からもう一方の極（死）へと時は経過してゆく。但し、この流れが主人公の突然の死によって思いがけないところで停止してしまう為、流れに巻き込まれるが如くに出没していた Jacob をめぐる人々の織りなす情景も同時にパッタリと絶えて、殆ど唐突に近い形で小説は幕を閉じる。「一体これをどうしたら良いんでしょうね、ボナミーさん」⁽⁶⁾ と言って母親が死んだ息子の古靴を突き出す最後の場面は、有為の若者の夭折から予想される悲嘆とはかけ離れた穏やかさに満ちている。その意味では、まだ時間の流れる小説ではあっても、*Jacob's Room* は既に時の経過につれて或る重要な結末へと導かれてゆくタイプの物語ではなくなっていることも事実である。どの瞬間も、等しくぼんやりと Jacob を照している。

Mrs. Dalloway に於て、Woolf ははっきりと「時」を意識し、「時」を相手にした小説を書く決心をしたようである。⁽⁷⁾ 極言すれば Woolf はこの小説の中で「時」を止めてみようとした。少くとも人間は時の流れに乗せられて、どこかからどこかへと移りゆくものではなく、「今」、「ここ」に踏み止まって己の姿を確かめようとする存在として表現されている。「現在」は「過去」と不可分に密着し、「未来」すら「現在」および「過去」の中に含まれているとでも言うしかない方法で、「時」は検証を加えられる。

Woolf が *Mrs. Dalloway* の舞台を1923年6月中旬の一日に限ったことには、*Ulysses* の手法の影響が明らかである。Joyce が1904年6月16日の早朝から、翌未明までの間の Leopold Bloom,

Stephen Dedalus, そして Molly Bloom 等の挙動を追いながら、森羅万象をテキストの中に溶かし込んで膨大な、そして滑稽な20世紀の叙事詩とも言い得る小説を書いたとするなら、Woolfもまた、6月の一日の朝から夜に至る Clarissa Dalloway, Peter Walsh, Septimus Wallen Smith 等の振舞を追いながら、彼らの内面の奥深くに分け入ろうとする。もっとも Joyce がその特定の日を執念深い厳密さで作品に刻印しようとするのに比べれば、Woolf の場合は「6月中旬の或る日」というだけで、それ以上の限定に向う意図は無い。それは空間の設定についても同様である。Joyce がダブリンの細部を街路から建物、室内装飾、小道具、果ては騒音に至る迄、詳しく記録し尽し、言語による街の再構築を試みたと言っても過言でないのに比べれば、ロンドンに対する Woolf の態度は、その様な激しい思い入れとは異なる。Mrs. Dalloway に登場する人々は Dalloway 邸のあるウェストミンスター地区とリージェントパークを結ぶ距離をおおよそその直径とする円の範囲内を動き回るところが観察されるのではあるけれども、Joyce がしたように地図とストップウォッチが手離せぬような厳密な動きではない。街は細密画として描き残されるのではなく、むしろその街に住み、その街を知り尽した者にも可能な鮮かな素描として、作品の背景を形作る。要するに *Ulysses* 程の固執は示さないとはいえ、Mrs. Dalloway も一日、一都市と作品世界の時空を限ることによって、〈流れてゆく時〉から解放された小説となり得たことは明らかである。

1923年6月中旬の水曜日——それ自体は他の日と何ら変わる事の無い凡庸な一日に過ぎない。Clarissa Dalloway がその日を自分の主催するパーティーの日に選んだだけのことである。第一次大戦終了から5年、ひとまずロンドンには平穏を保っている。Clarissa は52歳。数年前に心臓病を患って以来弱ったとはいえ、隣人の目には「魅力的な女だ……どこか鳥のようなところがある。カケスみたいな、青緑色をして、身軽で、快活で」⁶⁾と映る。夫 Richard Dalloway は国会議員を勤めるよりも地^{カントリー・ジェントルマン}方地主として野山を駆け巡る方が似合いそうな人物。一人娘の Elizabeth はおとなしい、美しく愛らしい乙女である。忠実な女中、料理女、召使の幾人かを抱え、一家はビッグベンの響くウェストミンスターにかかれこれ20年住んでいる。この日のパーティーは夫の要請によるものではなく、あくまでも Clarissa が発案し主催する、Clarissa のパーティーである。女主人役を自ら買って出た Clarissa にとって、この日は時々刻々が敏感になった神経に染み渡る刺激とならざるを得ない。その時々刻々の Clarissa の行動と心情、遠く近く Clarissa を巡る人々の行為と心情とが絡み合いながら、あるいは各々独立して、この一日を形成する。⁶⁾当然のことながら、この一日という枠組は、人々の内的活動を制限するものではない。それどころか外見上は如何にも些細な刺激によって、人々が突然に過去に引き戻され、過去のある瞬間の記憶が現在に生きて蘇るところを我々は絶えず目撃することになる。例えば小説の冒頭、パーティー用の花を買いに行く為、朝の大気の中に踏み出した Clarissa は、18歳の頃ボートン（父の邸宅

のありか)で早朝、大気の中に飛び出した時の感覚を思い出す。フランス窓の蝶番のきしむ音、「さざ波のような、波の接吻のような、冷たくて、鋭くて、敵かで……何か怖いことでも起こりそうな感じ」(p. 5)がその頃のままに蘇る。それと共に、立ち尽している彼女のもとに Peter Walsh が近寄って来て「野菜の真中で物思いにふけているわけかい」だか、「僕はカリフラワ―なんかより人間の方が好きだがね」(p. 5)だとか言ったことが同時に記憶に戻り、Clarissa は過去と切り結ぶのである。

そもそもパーティーを開くこと自体が、普段は拡散している意識の集中作業である。Clarissa は、何故自分がわざわざ労力を費して大がかりなパーティーを主催しようとするのか、一日中自問し続ける。朝の記憶に蘇って以来彼女の意識を離れず、しかもたまたまその日にインドから戻って Clarissa の前に姿を現す昔日の恋人 Peter も、夫 Richard も、決してパーティーに対する彼女の本意をくみ取ることは無い。男達の批判や無理解に抗いながら、Clarissa は自分の心の深みに降りてゆき、パーティーの意味を掴もうとする。

……彼女にとってこれは一体何を意味するのだろうか。この彼女が^{ライフ}人生と呼ぶものは。ああ、それはとても奇妙だ。サウスケンジントンには誰それという人がいる。少し北のベイズウォーターにはまた誰かがいて、別の誰かは、そう、メイフェアに住む。彼女はずい分続けてそういう人々の存在を感じていた。そして何でもったいないのだろうか、残念なことだ、とも思っていた。そしてもし皆をひと所に集わせることができれば、と願った。だから彼女はそうしたのだ。それはひとつの^{オフリング}捧^献だった。結びつけること、創り出すことは。だが一体誰に対する捧げ物なのだろうか。(pp. 134-5)

Clarissa はパーティー(=人寄せ)が他に何の外的意義をも含まない、^{オフリング}捧^献の^{オフリング}為の捧^献であることを悟り、そのような場を提供する能力は、自分に備わったおよそ唯一の才能であることに思い至る。いわば散在する人々をひと時、ひと所に集めることによって、Clarissa は^{ライフ}生命を実感し、^{ライフ}人生の充実を計ろうとするのである。Clarissa の一日はパーティーという高揚の瞬間への期待に満たされている。

しかし、同時にこの1923年6月中旬の一日は、Clarissa の関与しない所で一人の男が^{ライフ}生命を断つ日でもある。Septimus Wallen Smith は志願して一兵卒となり、第一次世界大戦に従軍してフランス戦線で親しい上官 Evans の戦死を経験する。イタリアの宿で出会った娘 Lucrezia を妻にして帰国するものの、彼は爾来幻覚に悩まされ、妄想にとりつかれ、絶えず自殺の衝動にかられてこの日に至っている。Septimus は Clarissa の人生には何の繋がりもない男である。

Woolf の実験は、全く無関係の Clarissa の人生と Septimus の人生とを同一の時空に置いて、

それぞれの動きに任せながら、現実的には一度も相見ることのない人間同士の内的な結び付きというものの可能性を探ることであった。つまり、同一の時空から一方が意志的に離脱した時、もう一方の人間がその死の意味をどれ程深く受け止め得るものかを見届けようとしたのだ、と言えよう。

Clarissa も Septimus もこの朝、ボンドストリートの路上で故障した要人（王室の誰か？）とおぼしき人物を乗せた車を取り巻く群衆の中に交じっている。あるいは、久々のロンドンに興奮気味の Peter Walsh は実際にリージェントパークで11時45分頃、挙動不審の若者と、悲し気な連れの女に出会っている。だが Septimus と Clarissa の世界とがかみ合う必然性は存在しない。ただ、パーティー^{たけなわ} 酣^{たけなわ}な頃、遅れて到着した精神科医 Sir William Bradshaw 夫妻が、患者の自殺の為に足止めを喰った旨をもったいぶって Dalloway 夫妻に告げることによって、Clarissa は初めて一人の男の存在（したこと）を知るのである。人生の高揚の瞬間であるべきパーティー^{ライフ}の最中に生命の終焉の知らせが持ち込まれて、Clarissa は驚愕する。彼女が朝の大気の中にかぎ取った何か怖いことの起こる予感^{ライフ}は、見も知らぬ男の自殺によって実現され、それと同時に Clarissa はその自殺に共鳴し、彼の行為を是認している自分を見出すことになる。穏かな、平凡な1923年6月中旬の、ロンドンの一日は、かくて過去と現在、生と死の出会い、普遍的時空の相貌をあらわにしてゆく。

§2 Clarissa をめぐる二人の男

Mrs. Dalloway には固定された時空の枠組があるだけで、その中に掬い取られた人々の精神活動はむしろ自在に現在と過去を往来し、それにつれて記憶の中での空間異動も即座に可能なことは既に述べた通りである。このような小説に於て、登場人物が従来の伝統的作品に見られるような性格描写や行為の分析によって成立するのではないことは言うまでもない。人々は互の印象の中に存在する。我々が *Mrs. Dalloway* の登場人物について知るのは全知の語り手による提示によってではなく、ある人物が、別の人物に対して抱く想念によってであり、また当人の心の中を去来する想念そのものによってである。*Ulysses* で Joyce の行った方法——すなわち、Leopold Bloom なら Bloom 当人にとっての必然性だけをかためにして、およそ脈絡の無い些末事が洪水の様に溢れ返り、また聖俗の区別無く混じり合う魂と肉体の動きが同時に示されるといった手法——と比較すれば、Woolf が *Mrs. Dalloway* で試るのはもっとはるかに精選され、単純化された「意識の流れ」の手法である。少くとも我々はテクスチュアの重層性や言語の変形によって、テキストの迷宮に踏み感うことはない。⁹⁰ それは Woolf が提起した小説論の初めての実践モデルといってもよいものである。Woolf は現代小説について次のように述べている。

心は無数の印象を受ける——他愛もない、幻想的な、束の間の、あるいは鋼の鋭さで切り込まれるような。あらゆる方向からそういう印象は入ってくる。数限りない原子の絶え間ない雨のように。そして降りかかりながら、印象は月曜日や火曜日の生活にその姿を替えてゆきながら、アクセントは以前とは違ったところにおりてくる。重要な瞬間はここではなく、そこにやって来た。だからもしもある作家が自由な人間であって、奴隷ではないのなら、書かねばならぬことではなく自分の書きたいことを書けるのなら、もし彼が慣習にではなく自分自身の感情に基いて書くことが可能ならば、世人の納得する既成の筋立てだとか、喜劇、悲劇の別だとか、恋愛関係、破局などといった形は無くなるはずである。いわばポンドストリートの仕立屋が縫いつけそうなボタンなどひとつも無くなるはずである。人生は左右対称に配置された一連の二輪馬車のランプなどではない。人生はぼうっと輝く光輪であり、意識の始めから終わりまで我々を包んでいる半透明の外被である。この変化する、未知の、制限の無い魂というものを、例えそれがどのような異形を示そうとも、複雑さを示そうとも、できるだけ余分な夾雑物や外界の物を混じえずに伝えることこそが、小説家の役目ではなかろうか。我々は単に勇気や誠意を求めているのではない。我々は小説にふさわしい素材というのは、慣習が我々に信じ込ませようとしてきたはずのものとは少し違っているということが言いたいのだ。⁽⁴⁾

このように宣言した Woolf は「光輪」であり、「半透明の外被」である人生を人物達の意識に飛び込む印象を通して提示しようとする。

Clarissa の人生を知る上で最も重要なのは、Peter Walsh と Richard Dalloway という二人の男達であろう。一方を退けて、もう一方を結婚相手に選んだことで彼女の生活の型は定まったのであるけれども、人生の煩悶から彼女が解放されるわけではない。若い日に情熱を込めて Clarissa を愛した Peter は常に最も仮借ない彼女の批判者でもあり続ける。Peter が突然この日、はるかな時を越えて目の前に現れることで、Clarissa はかつての自分の選択の意味を問い直すことを余儀無くされ、Peter も改めて Clarissa という女と自分について思いをめぐらすことになる。

何故 Clarissa は Peter を拒んだのであろうか。Peter の記憶を辿ってゆくと次の様な過去の情景が浮かび上ってくる。

1890年代の初頭、ポートンの邸宅に多勢の人々が入り出していた頃、Peter Walsh は Hugh Whitebread と共に常連の一人であった。Clarissa と Peter は暗くなる迄何マイルも丘陵地帯を踏破することを好み、詩について、人間について、あらゆることを議論した。彼は彼女に本を貸し、知識を与えた。しかし二人の間には喧嘩も絶えなかった。Peter が常に Clarissa の性質の深みにある実態を暴いて、それを指摘するからである。ある日、女中と結婚した男のことを種にし

て一同が談笑し、Clarissa が品の無いその女中上がりの女の物真似に熱中している最中、Sally Setton が、「二人が結婚する前にもう子供が出来ていたってことを知ったら、皆さんの気持に何かはっきりした違いが出るかしら」(p. 66) と言い出した。すると紅潮した Clarissa は「まあ、もう私、彼女には二度と話しかけられないわ」と言って、一同を気まずい雰囲気陥れる。その時の Peter の反応は辛辣極まりない。

彼は彼女がその事実を気にしたことで彼女を責める気持は毛頭無かった。当時、彼女のよ
うな育てられ方をした娘は何も知らなかったのだから。だが、彼を不快にしたのは彼女の態
度であった。臆病で、情容赦が無く、横柄で、上品ぶっていて。「魂の死だ。」彼は本能的に
そう言い放った。いつものように、その瞬間にレットルを貼りつけながら——彼女の魂の死、
と。(p. 66)

この出来事に続いて、その日の晚餐に初めて姿を現した Richard Dalloway を見て、Clarissa
がいずれ彼と結婚するであろうことを Peter は直観する。Richard に接する彼女の態度に「どこ
となく母親じみた、どことなく柔和な、一種のやすらぎ」を感じ取るからである。食後の Clarissa
の振舞にも Peter は増々反感を募らせる。

クラリッサが近付いて来た。完璧な作法で。まるで本物の女主人^{ホステス}のように。そして彼を誰
かに紹介しようとした。あたかも彼とは初対面であるかのような話し方で。彼は怒り狂った。
それでも尚、そのように振舞うことの故に、彼は彼女を憧憬した。彼女の勇気を。彼女の社
交的本能を彼は憧憬し、彼女の、事をみごとにこなしてゆく力を憧憬した。「完璧な女主人^{ホステス}
だね」と声をかけると、彼女は全身でおののいた。しかし彼はもとより彼女にそれを感じさ
せるつもりだったのだ。彼女がダロウェイと共に居るところを目のあたりにした後では、彼
女を傷つける為に何だってしただろう。(p. 69)

Peter の放つ「魂の死」と「完璧な女主人^{ホステス}」ということばは Clarissa についてまわること
になる。要するにこれらの評言が彼女の心証を害したからではなく、まさに正鵠を射ていた故に、
Clarissa は Peter を拒み、Richard をとる。Clarissa は互の魂の内奥を暴き立て合う相手よりも、
快活で、単純で、善意に満ち溢れた男の傍で「完璧な女主人^{ホステス}」役を務めることを自分の人生に選
んだのである。

Richard の認識はどのようなものであろうか。彼は Peter がかつて Clarissa を熱愛していた
ことはよく心得ている。そのことで動揺したり、妻の愛情に不信を抱いて苦悩することの決して

ない男が Richard である。それでもさすがにこの日 (1923年6月某日), Lady Burton の午餐会の席で、久方ぶりに Peter Walsh がインドから帰ってロンドンに居るはずだという話題に接した時、何の感慨も抱かぬわけではない。街に出ると、彼は妻に何かを贈りたいと思うものの、女性の装身具を選ぶような器用さは無い。彼は大きなバラの花束を手に入れて、昼下りの道を自宅へ急ぐ。

今まさに彼はロンドンを横切ってクラリッサにはっきりと愛していると言う為に歩いているところだった。そんなことは言わないだろうなあと彼は思った。怠け者だってこともあるし、恥ずかしいってこともある。そしてクラリッサは——彼女のことを考えるのは難しかった。ハッと思いついたような時以外は。ちょうど午餐会の時のように、あの時彼はまったくはっきりと彼女の姿を思い浮かべた。自分達の生活のことも。(p. 127)

交叉点で立ち止まった時彼は「クラリッサと結婚したなんて奇跡だ。自分の人生は全くの奇跡だ」(p. 128) と思い、通りや公園の人々に気を取られながらも、「まるで武器のように花束を抱えて」(p. 128) ひたすら家路を急ぐ。東の間、彼の胸にはかつて Peter と Clarissa に嫉妬したことが蘇って来るが、その思いはすぐさま、「彼女^{あれ}はしばしばピーター・ウォルシュと結婚しなくて正解だったわと語った」(p. 129) のだから、と打ち消されてしまう。そのことは「クラリッサという女をよく知っていれば明らかに正しかった。彼女は支えが欲しかったのだ。彼女が弱いからじゃない。彼女は支えがどうしても欲しかったのだ」(p. 129) という彼なりの結論に達して一件落着する。

自分の突然の帰宅と思いがけないバラの花束に面喰う Clarissa を前にして、結局 Richard はとても「愛している」などという科白は口にできない。ただ並んで腰掛けて手を取り合い、こもごもにこの日の朝から昼にかけて会った人々のこと(むろんその中には Clarissa の Peter との再会の件も含まれている)、出来事などを二人は断片的なことばで語り合うのみである。しかしその語らいの最中に Richard は「これが幸福というものだ」(p. 131) と一度ならず考える。そして安心し、満足を得て、枕と毛布を抱えて「昼食の後には一時間の完全な休息を」(p. 132) という医師の指示に従うべく部屋を出て行く。Richard はバラの花束が心を代弁し、居間でにこやかに自分を迎える妻の存在が結婚生活の幸福を何より象徴すると信じて疑わない男である。Clarissa はこの「崇高なまでの素朴さ」(p. 132) 故に彼を愛した。しかし同じ彼の性質故に Clarissa がいか程の空漠感に悩んでいるかを彼は永遠に知ることはないのである。

Peter と Richard という両極の間で Clarissa が惑う、ということではない。Woolf は先の宣言に明らかな通り、定形的な男女の三角関係や結婚の破綻、あるいは不義といったことには無関

心である。Mrs. Dalloway という社会的地位^{ステイタス}に取まった一人の女、Clarissa の魂を幾つもの瞬間に捕らえようとして、Peter, Richard それにこの日 Dalloway 邸に出入する数多くの人々を Woolf は繰り出すのだといえよう。わけても長年暮らしたインドからロンドンに戻ったばかりの Peter は、53歳にして依然住む家も定まらず、家族も持たず、職業とても今改めて人伝に探そうという有様であればこそ、イギリスの体^{エスタブリッシュメント}制に組み込まれぬ異端者の目をもって、Clarissa の実態——結婚によって夫の体現するこの国の支配階級の価値観を我が物とし、身分、所属社会に拘泥して、廃残者、はぐれ者を嫌う、という俗物性——を看破するのである。

しかし、30年前に Clarissa を熱愛した Peter は、彼女の生来の魅力も熟知している。Clarissa が単なる美しさや知性とは全く別の要素、「どこにいようと自分自身の世界を創ることのできる、あの女性の才能、あの特異な才能」(p. 84) に恵まれ、「そこに彼女がいる」(p. 55) と確かに感じさせる存在感を発揮していたことを彼は記憶している。だが Clarissa への執着から自分を解放する為にも Peter は彼女の「魂の死」を凝視しようとする。自分の現在の恋愛と活力とに耽溺し、もう Clarissa のことは恋していない、と繰り返しつつやきながら。

Clarissa にも言い分はある。かつて自分に求婚し、拒まれて姿を消し、いつの間にかインドへ行ってしまったかと思うと、よりによってパーティーの準備に忙しい日の昼前に突然訪れて、まるで昔のようにソファに並んで腰掛け、「今は幸福なの……？」(p. 53) などと聞く男。そして自分の目下の人妻との恋愛について告白し、涙まで流し、手の甲に接吻して、またたく間に出て行ってしまふ Peter。一瞬確かに Clarissa は「もしこの男と結婚していたなら」(p. 52) と思い、「私を連れて行って」(p. 53) と言いたい衝動にもかられる。病氣以来、「ぴんと張ったシーツに狭いベッド」で孤閨を守る我が身が、「一人塔の上に残され、他の人々は陽光の中でイチゴ摘み」(p. 52) をしているようにも思える。肝腎な Richard は自分を置いて Lady Burton の午餐会。Clarissa は孤独を痛感し、焦燥感にさいなまれる。だがそのような束の間の感覚はすぐに消え、彼女は30年前の選択の正しさを再認識する。人と話をする時、ポケットナイフを弄ばずにいられない Peter は昔と変わっていない。Clarissa には Peter の危さがはっきりと見えるのである。

魅力的で、賢くて、何にでも考えを持っている男が一人。ローマ教皇のことについてでも、そう、アディソンのことについてでも知りたいなら、あるいは下らない冗談でも、人間とはどんなものかとか、出来事の意味についてでも話してみたいなら、ピーターは誰よりもよく知っている。彼女を助けてくれたのも、本を貸してくれたのも、みんなピーター。でもピーターの惚れた女を見るがいい——悪趣味で、他愛無くて、下品。ピーターが恋をしているとは——何年も何年も経った後で会いに来て、彼は一体何を話していったというのか。自分のことばかり。おぞましい情熱のこと、と彼女は思った。下劣な情欲ではないのか。(p. 140)

Clarissa は彼の自己中心癖を糾弾する。ものは知っていて、他者を批判することに長けてはいなくても、本当の心の裏の奥深くを思いやることの出来ない男に、彼女は幻滅している。にもかかわらず、Clarissa はこの日 Peter に「お会いできて何という感激だったことか。そのことだけはお伝えしたくて」(p. 170) という短信を送り届けて、彼の侮蔑もかい、彼を動揺させもする。その「いかにも彼女らしい」(p. 171) 偽善と真情の混交が、結局は Peter をもパーティーへ誘うこととなる。

Peter にせよ Richard にせよ、二人共に Clarissa のパーティー開催の真の動機を理解しないのと同様、彼女の真の欲求、微妙な心の陰りを我がものとするのではない。Clarissa は Richard との間にも越え難い深淵のあることを感知し、人間の孤独をかみしめ、独立と自尊心を保つ為の「計り知れぬ程高価な」(p. 132) もののあることを思う。Clarissa がパーティーを控えて直面するのは、社交の華かさとは無縁の、そのような人生^{ライフ}の根源的問題である。

§3 Septimus のテーマ

Mrs. Dalloway に於ける Woolf の創意工夫を我々は作品の随所に見出すことができるが、構成上の実験の中でも特に大きな問題のひとつは、Septimus のテーマをどう考えるか、ということではなからうか。Woolf はくっきりとした時空の設定によって限った世界に、思いがけない奥行きを与えて多くのものをその中に詰め込んだ。

人は深い感情からものを書かなくてはならない、とドストエフスキーは言った。ところで私はそうしているだろうか。それともことばの好きな私は、ただことばでものをこしらえているのだろうか。否、そうは思わない。この本の中で私はほとんど多すぎる位のアイデアを持っている。私は生と死、正常と狂気とを書きたい。私は社会制度を批判したい。それが最も強烈に働いているところを示したい。〈6/19 (火) 1923〉(p. 81)

と Woolf は日記に書いている。Septimus はこのような Woolf の欲求を実現する媒体である。しかし、自らも時折襲って来る精神錯乱に悩む Woolf にとって、Septimus の創造には切実なものが込められている、と我々は推定せざるを得ない。

Clarissa とは縁もゆかりもない Septimus の為に作品のかなりの部分を費やすことの是非については、Woolf にも初めから確信があった訳ではない。彼女が「過去を必要に応じて分割払いの方法で語る」、「トンネル掘り作業」と呼ぶ方法を一年間の模索を通して発見したように、Septimus の情景を描くことも Woolf が「ダロウウェイ夫人の扱い方を学んだ結果として生じてきたあと

からの思いつき」であるという。⁴⁴ Septimus という、いわば異形の精神を浸入させることによって、Mrs. Dalloway の小綺麗な世界は反転し、とりすました上流階級の流儀^{マナーズ}では統べられない、人生の内実が白日のもとに晒されることとなる。

Septimus の存在を可能にしているのは、言うまでもなく ロンドンという器である。如何にその中の狭い地域とはいえ、街路や公園をさまよひ、ブルームズベリーの宿屋の窓から飛び降りる Septimus の人生最後の一日に多様な刺激を与えるのはロンドンであり、ありとあらゆる人間の人生を飲み込んでしかも個々の運命には極めて無関心なもの、大都会ロンドンである。

Woolf は短編 “Kew Gardens” で植物園を老若男女の行きかう人生の縮図として提示しつつ、「入れ子細工」(Chinese boxes)⁴⁵ の比喩で微細な世界と巨大な世界とを花壇を中心にして同時に視界に入れて見せた。そこで磨かれた手際が、ここではリージェントパークの場面で活用される。遠い爆音を振り撒きながら上空を飛び、宣伝文字を煙で空中に書いてゆく飛行機が先ずロングショットで捕えられる。地上では、ザ・モールでも、ピムリコでも、グリーンパークでもピカデリーでも、人々がそれを見上げてアルファベットを判読している様子がゆっくり写し出され、やがて視線はリージェントパークを縦に走る通り、ブロードウォークのベンチに腰掛けている一組の男女の上に止まる。飛行機の書く文字に気付いた Lucrezia が夫、Septimus の関心を外界に向けようと、やっきになって空を指さし、やがてその単なる宣伝文字を、自分に向けられた特殊な信号と思ひ込んで、大空の文字の美しさに涙する Septimus の複雑な心象風景の中へと、我々は入り込んでゆくのである。同一の時空を共有し、一つの現象を前にしても Septimus にとって、世界は他の人々と全く違う意味体系に変質してしまっている。そしてこのズレを最も痛み、苦しむのは当人ならぬ Lucrezia の方である。子供達が戯れ、乳母達がそれを見守り、旅人は一時の憩を緑陰に求め、都会に出て来たばかりの田舎娘がうろうろと通り過ぎるロンドンのど真中の公園で、Lucrezia は奇矯な振舞をする夫の傍に居て救いようのない孤立感に襲われている。

Lucrezia の目に見えるものは、故国を離れてやって来た夫の国イギリスのよそよそしさ、結婚して5年も経つのに子供を産むことに同意しない夫、日夜不可解なことばをつぶやき、それを筆記するよう命じる夫、自殺をほのめかす夫、そして夫の狂気を誰にもうちあけることのできない自分の惨めさだけである。心痛の余り痩せて、結婚指輪さえはめておけぬ有様となつて尚、この素朴なイタリア女には Septimus の狂気の本性を掴む力は無い。二人の結びつきの経緯を辿れば、それも無理からぬことではあるのだけれども。

……エヴァンスが殺された時、イタリアで、停戦のほんの少し前に、セプティマスは如何なる感情を示すことから、これが友情の終りだと認識することからも程遠い状態にあって、自分がものを殆んど感じないことや、ひどく理性的なことを喜んでた。大戦は彼によく教

えてくれた。それは崇高なものであった。彼は既にあらゆる見世物をくぐり抜けて来ていた。友情，ヨーロッパ戦線，死。昇進もしたし，まだ30前で，生きのびようとしていた。最後の爆弾は彼に当らなかった。彼は全く無関心に，それが爆発するところを見た。平和がきた時，彼はミラノに居て，旅館の主人の家に宿舎を割り当てられていた。その家には中庭があって，桶に花が植わっていて，表に小さなテーブルがいくつも出ている。娘達が帽子をこしらえていた。そしてルクレジアと，その若い方の娘と彼は，ある夜，あの恐怖——何も感じないという恐怖が襲って来た夜に，婚約したのだった。(p. 96)

Septimus の方にはもともと愛情という幻想は無い。既に戦場で感情一切を剝奪されているのだから。所謂「人間らしさ」から見放された恐怖にかられてしがみついた相手が，たまたま Lucrezia だったということになる。ところがロンドンに戻って外界との齟齬が増々著くなるにつれて，Lucrezia すらも Septimus にとっては煩わしい敵対者に見えてくる。肉体の交わりも彼は嫌悪する。彼は Shakespeare に傾倒し，Dante を，Aeschylus を読みあさり，ことばの世界にのめりこんで，やがて木々も壁も物音も，周囲の一切が自分にこの世の秘密を語りかけているという感覚のとりこになる。そして何も感じることをできない自分に残された道は死ぬことだという観念に固まってゆく。

おそらくは分裂病と呼ばれるこのような症状に陥った男を内面から描くことは，似たような幻聴にしばしば襲われたという Woolf にとって，決して楽しい仕事ではなかったはずである。また，それを見守って常に自殺衝動から患者を此岸に押し止める役目を背負った「狂人」の伴侶たるものの苦悩についても Woolf は知り抜いていたはずである。敢えて Septimus と Lucrezia の不幸を詳細にわたって *Mrs. Dalloway* の主流の情景の一方に書き込んだのは，それが Clarissa の人生の実態を浮かび上がらせる何よりも強い光源となることへの予感があったからではなからうか。

計らずもふたつの人生の橋渡しをする人物は，辣腕の精神科医と世評の高い Sir William Bradshaw である。町医者 Holms の手に負えなくなった Septimus を Lucrezia は最後の望みをかけて Bradshaw のもとへ連れて行く。彼女が「精神の助け手」，「科学の司祭」(p. 110) と頼みにしたこの医者がおよそ期待とは裏腹の，冷酷な実務家であることはすぐに明らかになるのではあるけれども。Bradshaw は元々商人の息子で，自分の腕一本で現在の地位を築き上げた人物である。押し出しの良さと弁舌のさわやかさ，確固たる遵法の精神によって爵位を受け，ハーレーストリートに邸宅を構え，豪華な自家用車，毎週の晩餐会，上流階級の患者達を我がものとする男。診察時間は患者一人につき45分。Septimus を見たとたんに彼は心身衰弱と判定し，隔離加療の必要有りとの診断を下す。驚愕し，抵抗を示す Lucrezia に対して，彼は「狂気」とい

うことばは使わない。Septimus が「均^{プロモーション}衡の感覚」を失っていることが、郊外の隔離施設で有能な看護婦の世話を受けながら、暫くの間ゆっくりと休養をとらなくてはならない理由だと説明する。Lucrezia は、ただ本能的に、直覚的に、専門医によるこの高圧的命令に不当なものを感じ取る。Bradshaw を嫌悪することに於て、Lucrezia と Septimus はひとつになる。そしてテキストには彼を叫弾する「声」が確かに響いているのを我々は耳にする。

均衡を崇拜しながら、サー・ウィリアムは私腹を肥やしたのみならず、英国を富ませ、英国の狂人達を隔離し、子供を産むことを禁止し、絶望を有罪と決めつけ、不適応者が自分の見解を伝えることを不可能にして、遂には彼らもまた彼のいう均衡を共有するまでにしたのである……その結果同僚の尊敬を受け、部下を恐れさせるばかりか、彼の患者の友人や親類一同こぞって、そういう世界の終りや神の降臨を予言してやまぬキリストや女キリスト共に、命令通りベッドでミルクを飲むよう強制してくれたことに対して彼に絶大な感謝の念を捧げるようになったのだ。このような症例を30年も見続けて来た経験を受つサー・ウィリアム、そして彼の誤またぬ直覚、これは狂気だ、この感覚は。彼の均衡感覚というやつは。(p. 110)

「声」は更に続けてこの「均衡感覚」の姉妹ともいべき「改^{コンバナーション}宗」(もしくは「信条の転向」)を強要する力が、如何に巧妙に「愛」や「義務」や「自己犠牲」という姿に変装して、社会の隅々にまで浸透し、人々の自由意志を奪い、弱い者達を強権に巻き込んでゆくかを明らかにしようとする。Sir William Bradshaw が自分の妻を先ず第一の犠牲者として意のままに従えるようになった経緯と、患者が尊重されるのではなく、彼の行為が全てのものに君臨する様が述べられ、Lucrezia の抱いた本能的不信感の根拠が証拠立てられてゆく。

その「声」を Woolf のものだと言うこともできよう。あるいは作者に最も近い架空の意識——Mrs. Dalloway の一日に忍び込んだ或る意識——と評言できるかもしれない。いずれにせよ、この日の夕刻、束の間の団欒を取り戻していた Septimus 夫妻のもとに、Bradshaw 一派(現実的には Holms 医者)の手が伸びた時、Septimus は「均^{プロモーション}衡」も「改^{コンバナーション}宗」拒んで、唯一の脱出口であった部屋の窓から飛び出すのである。「本当は死にたくなんかないんだ。人生は良いものだ。太陽が輝いて」(p. 164) という最後の意識を残して。不合理なものではあっても、それが人間の自由意志の究極の発現ならば、何人もこの自殺を食い止めることはできない。気を失うように眠りにつく Lucrezia の耳に単調な時計の音が6時を告げる。Septimus の一日は、このようにして終る。

もし正気と狂気という二分法を用いるなら、Bradshaw と Septimus はそれぞれの陣営の雄として位置付けられるであろうし、生と死、体^{エグプリシメント}制^{アウトカースト}と異分子という区分けでも同様であろう。

さて Clarissa はどうか。盛大なパーティーを開いて Bradshaw を招き、生を愛する彼女は形の上では明らかに Septimus とは無縁の人間、破綻無く成功者の社会に安住する女である。けれども、無言の死者 Septimus はこの日誰よりも Clarissa に大きな衝撃を与える力を持っている。彼女が意識的に選び取って来たはずの^{ライフ}人生というものの危うさと虚しさに、最早彼女は目をつぶってはいられない。二分法こそが意味を失うのである。

§4 パーティー＝生と死の会うところ

Clarissa のパーティーには、彼女の記憶に蠢いている人々、意識に浮沈を繰り返すあらかたの人々が実際に集まって来る。そのうちのほんの幾人かを数えるだけでも、Clarissa の乳母だった婦人とその娘、Peter Walsh、呼ぶのをためらった末とうとう最後に招待してしまった従姉の Ellie Henderson, Hugh Whitebread, この日 Clarissa を無視して Richard だけを午餐会に招いた Lady Burton, 招待状無しに跳び込んで来た若い日の Clarissa のアイドル Sally Setton 改め Lady Rosseter, 首相, Clarissa の老伯母 Miss Helena Parry, そして最後に Sir William Bradshaw 夫妻等々……。これらの人々を迎える為に Clarissa は臨時の召使や女中を雇い入れ、料理女や小間使にも格段の気遣いを怠らず、調度品、什器類、室内装飾一切を最高の状態に整えて、Dalloway 家総力を挙げての一大行事の主催者を勤めようというわけである。

しかしながら、パーティーは当初の期待通り、人々の生命が寄り集う祝祭空間を Dalloway 邸に現出することに成功するのであろうか。首相というような要人も含めて、招いた人々の殆どが姿を見せ、よほど場違いな Ellie Henderson を除いては、話し相手も無く壁に寄りかかっている者もおらず、吹き込んだ外気に翻るカーテンを客の一人が無意識に叩き返してまで会話に熱中している光景が「結局のところ失敗ではなかった。大丈夫、うまくゆきそうだった」(p. 187) と感ずる一瞬を女主人に与える——そのような意味でなら、見たところ、パーティーは盛会である。反面、次々と到着の告げられるどの客に対しても Clarissa が、「お会いできて何て嬉しいんでしょう」、「まあ、わざわざお越し下さって、本当に嬉しゅうございますわ」(p. 188) といった文切型の口上しか述べないところを見ると、Peter が「彼女の最悪の状態——大仰で、不誠実で」(p.184) と心の中でこきおろすのを聞くまでもなく、実際のパーティーというものは、集う人数の多い分だけ、個人と個人の濃密な充実した出会いとはかけ離れた場となる運命になることをさらけ出しているのも事実である。「リチャードに会ったら、奴ら保守派の能無し連中がインドをどうするつもりでいるのか聞いてみよう。一体今どんな行動がとられようとしているのだろう。それから音楽もあるし……ああもちろん他愛の無い噂話」(p. 177) と予想をつけてやって来た Peter の勘に狂いは無い。パーティーはそれ以上でも以下でもない。ただ、彼は秘かに、「この年にして、確実に何か、ある経験をするはずだ、と確信して」(p. 179) パーティーに赴くのもある。達観

と期待との交錯が様々なレベルで行われる。遠景としてのパーティーは、凡庸だが模範的な秩序と賑わいを見せ、そこに集う個々人の内面では、普段以上の孤独で複雑な思惑が無秩序な模様を描いている。Woolf の手法は一度にその両者の光景を我々に提示して、Clarissa のパーティーの実態を明かそうとするものである。

何よりも著しいのは、Clarissa の外面と内面の分裂である。このパーティーの最も厳しい観察者にして批評家である Peter の目にすら、彼女の姿はある瞬間、次のように映る。

そして今まさにクラリッサは彼女の首相に付き添って部屋をこちらに向かって来るところだった。意気揚々として光り輝きながら。白髪ホステスの風格を漂わせて。彼女はイヤリングをつけ、銀緑色の人魚を思わせるドレスを纏っていた。波間に遊び、巻毛をより合わせる人魚のように見えた。いまだにあの才能、つまり、そこに居る、存在する、彼女が通り過ぎてゆく一瞬に一切を統合するという感じを与えるあの力を持って。彼女は振り返った。誰か他の女のドレスに自分のスカーフの端を絡ませてしまって。それを外し、笑い声を上げた。何もかも文句のつけようのない寛ぎと、自らの本領にありといった雰囲気ホステスのうちに。しかし歳月は既に彼女をかすめていた。いかに人魚でも、おそらく彼女は鏡に映る波間の落日を、ある天気の良い日の夕方に見たことだろう。柔和なかんじがまとわりついていて。彼女の厳しさや淑女ぶり、木のような堅さは今やすっかりぬくめられて、彼女がぶ厚い金モールをつけた、重要人物に見えるよう涙ぐましい努力を払っている人物（彼に幸あれ）に別れを告げている時に、彼女には言いようのない気品があった。とびきりの真心というものが。まるで彼女は全世界の安寧を祈り、諸物の突端、縁際に立っていとまごいをしようとするかのようであった。

(p. 191)

ここに至って「完璧な女主人ホステス」ということばに込められた皮肉な響きは影をひそめ、そのような地位と役割を突き抜けた境地にまで Clarissa が達したことを彼女の外見から Peter は認めるのである。夫を入閣させるところまではいかなかったとしても、Clarissa の政治家の妻としての働きは十二分に尽され、最早主体は彼女の方であり、女司祭者と見まごう態度でこのパーティーに臨む有様に陰りは無い。しかし、いかな Peter にもこの外形とは裏腹の彼女の内奥は見抜けない。

Clarissa は既に女主人ホステスの役割を楽しむような心境とはおよそかけ離れたところにいる。女主人役をこなすことは無個性に徹することであり、しかもその「誰でもあって誰でもない」(p. 187) 者抜きにパーティーは成立しない。他人の目には華やかな、陶酔の瞬間とも映るパーティーの中心に位置する彼女自身は、自分を「階段のてっぺんに打ち込まれた棒杵」(p. 187) のように感じ、

また「うつろさ」(p. 191)をも感じている。Clarissa の回りには、手が届くところになつかしい人々がひしめいているにもかかわらず、彼女の心はその人々によっては満たされなくなっている。Clarissa が突然思い出し、その瞬間に最も求めていることを自覚するのは、そこに居るはずの無い人物である。「彼女の宿敵 Kilman それこそが満足だった。それこそが現実だった。ああ彼女はどんなにあの女を憎んでいたろう——けしからぬ、偽善的な、墮落したあの女。威力に溢れたエリザベスの誘惑者。忍び込んで、盗んで、汚したその女を……彼女は憎んでいた。彼女は愛してもいた。欲しいのは敵共であって、友人達ではなかった……」(p. 192) というこの想念も、流れゆく束の間の印象ではある。一晩中 Clarissa が Kilman のイメージにとりつかれているわけではない。だが、愛情に端を発する Peter の批判よりもはるかに強い、憎しみに貫かれた Kilman の抱く敵意と、Clarissa はこの日真正面から対決するのである。それは、これ迄の Clarissa の人生に於て彼女が一度も経験したことのない激情である。深窓の令嬢であり、名家の奥方である Clarissa の既成概念を破壊する存在——醜く、貧しく、歴史の知識だけを武器にして Elizabeth の家庭教師になった Kilman——が、彼女を脅かし、根底から揺さぶりをかけてくる。美も、富も、愛情も、家も、家族も、友人も、何一つ持たない Kilman が、あらゆるものを持ち、ゆったりと安全な場所に身を置く（かに見える）Clarissa に対して、他のどの人間にも見出し得ぬ憤怒の情を抱くところは、秘かな、しかし無視することのできない、この一日の重要な瞬間である。パーティーに先立つこの日の午後、二人は向き合う。

馬鹿！ 間抜け！ 悲しみも喜びも何も知らないくせに。人生をただ無駄遣いしてきただけのくせに。この女を征服してやりたい……仮面を剥いでやりたい……いっそぶち倒してやったら気も晴れるだろう。だが服従させたいのは身体じゃない。魂とその嘲りの方だ。こちらの支配力を感じさせてやりたい。泣かせてやりたい。滅ぼしてやりたい。辱しめてやりたい。「あなたの仰ることが正しい！」と泣きながら跪かせてやりたい (p. 138)

Kilman の凝視にこめられたこのような感情を即座に憐憫の情で受け止め、慈愛に満ちた微笑にして返した時、勝利は Clarissa の方であったはずである。にもかかわらず、パーティー最高潮の瞬間に、彼女はそこに居る他の誰よりも不在の Kilman に現実性を感じず。Clarissa が無意識のうちに心ひかれているのは、バラの花に飾られた人生の饗宴ではなく、その向う側にある凄絶なまでの孤独との対峙であることの、これは象徴ではなからうか。

その意味で、パーティーの最中 Clarissa に更なる威力を及ぼす二人の人物もやはり参会者でないことは興味深い。一人は言うまでもなく自殺した Septimus であり、もう一人は向いの家の窓に Clarissa が時折姿を認める老婆である。自分とは無縁の、名も知らぬ、もの言わぬ二人に

よってもたらされる啓示の真正なことを彼女が悟る瞬間は、パーティーの喧噪と切り離された小部屋にふと入り込んで、一人きりになった時に訪れる。

初めに彼女を圧倒する感情は怒りと恐れである。もともと「あの男の趣味も匂いも嫌いだ」(p. 201)と思っていた Sir William Bradshaw が、夫人と共にパーティーの席へ「死」の知らせを持ち込む無礼と忌わしさに Clarissa は震憾する。窓からの身投げという情報に、彼女はその有様をはっきりと思い描いて肉体的な苦痛さえ感じる。しかし不意に、誰もが日常顔を背けている「加齢」という容赦ない現実、この青年が挑戦し、到達不可能と思われている「核心」に彼が飛び込んだのだということに Clarissa は気付く。「親密さはほどけ、陶酔は色褪せ、人は皆一人きりだ。死には抱擁がある」(p. 202) という、冷厳な事の核心に。そして、社会的名声の仮面の下にある Bradshaw の下種な本性を感受性の鋭い青年が見たとしたら、生き続ける意欲を阻喪させられても不思議は無いと納得すると共に、Clarissa は己れの中にもある死への衝動が、Richard の存在によって辛うじて抑えられているに過ぎないことを自覚する。青年の死は、Clarissa に己れの生の危うさと、その虚飾に満ちた実態というものを、はっきりと照し出してくれるのである。その時、突然至福の感覚が彼女の内部に湧き起こる。果たして、窓辺に寄った Clarissa が対面するのは向いの家の老婆である。唯一人、無言で寢床に赴く為に静かに動き回り、やがて戸張を下ろし、明りを消して闇に消える老婆に Clarissa は見入る。時計が鳴り始める時、Clarissa は最早死んだ青年を哀れまない。

……もう太陽の熱を怖れるな。彼女は人々のもとへ戻らねばならない。だが何という奇妙な晩だろう。彼女はどのような訳か彼——自殺した青年に自分がとてもよく似ているような気がした。彼女は彼がそれをやらかしてくれて嬉しかった。他の皆が生き続けているのに、それを放り投げてしまって。時計が鳴っていた。鉛の輪がいくつも空中に溶けて拡がっていった。でも彼女は戻らねばならない。集わねばならない。サリーやピーターを探さねばならない。そして彼女は小部屋から姿を現した。(pp. 204-5)

この小部屋での時間は Clarissa の冥界探索といっても過言ではないであろう。Clarissa がこの日意識の表層に幾度かのぼらせた、「最高の神秘」に対する疑問。批判者、識者が仮りに悟ったと豪語したとしても、その信憑性が Clarissa にはどうしても納得できない、観念によってはいかんともし難いもの。それを彼女は「ここにひとつの部屋がある。あそこにももうひとつの部屋がある。その事実を宗教だとか愛だとか解いてみせたことがあろうか」(p. 141) と表現している。そのことが、パーティーの終りになって此岸と彼岸の一体化という形で Clarissa の感得するところとなる。この一日を通じて繰り返し響いていたライトモチーフのひとつ、*Cymbeline*

からの引用である歌詞「もう太陽の熱を怖れるな」という句が Septinus と Clarissa を結び、¹⁴ 窓辺の老婆の孤高の姿は最終的に Clarissa の死への恐怖をぬぐい去る。Clarissa は生の只中^{ライフ}にあって死と切り結ぶ。この時初めて Clarissa のパーティーは虚栄の宴であることを止めて、真に人間と人間の集う生命^{ライフ}の場と化す。肉体の死、精神の死を、生の中に既に色濃く漂わせている参会者達は、Clarissa も含めてまぎれもなく「今」、「ここ」に在るのである。女主人^{ホステス} Clarissa はそれを悟ればこそ、パーティーの場に蘇る。

§5 結び——Clarissa という女の「存在」

1923年6月中旬の一日、その幾つもの瞬間に捕らえられた人々の意識、記憶、束の間の印象——*Mrs. Dalloway* の実質を成すのはこれ迄に見てきたように、このような移ろい易い、不定形のもの連鎖である。人々の離合集散が極めて限られた範囲の中で繰り返されるところに、我々は立ち合う。そして瞬間から瞬間、或る意識から別の意識へと渡り歩きながらも、常に我々が立ち帰って来るのは Clarissa という女のもとである。この Woolf の Clarissa は、Joyce が *Ulysses* で創造したあの Molly Bloom に拮抗する存在となり得ているであろうか。

伝記的事実を拾い集めたところで、何ら目覚ましいものは無い。Clarissa はヴィクトリア朝後期の良家の子女が辿るであろうまっとうな道を歩んで結婚をし、娘を得て、夫の庇護のもとに平穏な一生を終えるはずの凡庸極まりない一人の女である。彼女には所謂ヒロインの相は無い。Peter の心に生涯消すことのできない失恋の痛みを残したといったところで、次々と女達を追いかける瞬間に於ては興奮と情熱に満たされる彼にとって、Clarissa が「運命の女」(femme fatale) というのは当らない。Richard にとっては居てくれるのが当り前の妻であり、Elizabeth にとってはいたわるべき母、そして使用人達から見れば優しく物わがりの良い奥様である。他人のうちのある者は彼女を軽視し、ある者は敵視し、また別の者は賞賛し、憧憬し、逆に侮蔑するものもあれば無視する者もある。要するに、我々が Clarissa の意識の内側に入り込めば入り込む程、彼女が何ら特別な人間ではないことを知るだけである。知性の面では赤道の何たるかも知らず、古典に精通しているわけでもなく、アルバニアとアルメニアの区別さえいいかげんで、芸術にも疎いことはすぐ知れる。だが、その彼女の唯一の[・][・][・]とりえとして自他共に認める Clarissa の力——彼女の「存在感」というもの——を我々もまた感知し得るだろうか。

もう一度だけテキストに戻って最後のページを聞けば、我々は Peter が不可解な恐怖とエクスタシーと興奮に捕らわれているところと出会う。その訳を Clarissa だ、と彼は言い、「というのもそこに彼女が居た」(p.213) と結んでこの小説は終る。前に述べた通り、Woolf の意図はこの先の Clarissa と Peter の関係の発展なり解消になどない。Woolf は Peter の意識を媒介にして、Clarissa の「存在」の確かさを作品の終止符にしたのである。どのような事件よりも、ど

のような運命の波乱よりも、Woolf は「一人の女が存在した」という生命の核心だけを作品に刻印したかったように思われる。それは次のような Clarissa の意識と最もよく呼応しているといえるであろう。

いずれにもせよ、一日は必ず次の一日に続く。水曜、木曜、金曜、土曜。人は朝起きると空を見上げ、公園を歩けば Hugh Whitebread に出会う。それから突然 Peter が飛び込んで来たりして。それからこのバラの花束。もう充分だ。その後で死は何と信じ難いものなのだろうか。これが必ず終りになるものだとは。そして全世界の誰一人としてどれ程彼女がこれをみんな愛したか知ることもないとは。どれ程あらゆる瞬間を……(p. 135)

Mrs. Dalloway の一日の各瞬間は、こうして Clarissa の生と死を繋ぐこの世での存在に源をもっている。Clarissa は特異な「個性」ではなく、「非個性」を象徴する女である。その存在の特徴は、「私は、私が」と自己を全面に押し出すことの絶えて無いことである。Woolf の意識の流れの手法からは、特にこの *Mrs. Dalloway* に於て注意深く一人称代名詞は排除され、三人称による叙述がテクスチュアの殆んど部分を覆っている。従って我々読者は Clarissa の主観的な意識に巻き込まれることなしに、彼女の「存在」に寄り添うことを許されるのである。他の人物の意識についてもそれは同様であり、言うなれば Clarissa の自己主張の無さという特徴が作品全体の基調を成している。Woolf はこのような形で独自性を発揮した。

Woolf が同時代の作家 Joyce の達成を強く意識し、激しくその「自己中心癖、自己主張癖」を非難したことは先に述べた通りである。*Ulysses* に於ける圧倒的な物量攻勢、言語実験、伝統的価値観からの逸脱などに比較してみれば、確かに *Mrs. Dalloway* は、小じんまりとした、ささやかな実験と言わざるを得まい。Molly Bloom の発する全肯定的 “Yes” という結語に、女性の豊饒と、*Ulysses* の持つ生命感を認める読者は少なくない。⁴⁹ だが、*Ulysses* を「なまの肉」と表現した Woolf は Joyce の手法と芸術を鵜呑みにはせず、同時代の女性として自ら「料理」してみせたのが Clarissa という女である。女性の肉体性、エロティシズムという要素をはるか後方に退け、それらを賛美もせず卑下もせず、年を経て52歳という時を迎えて生と死の両方に結ばれた一人の女を描くこと。Woolf は Clarissa から「なまの肉」の要素を故意に抜き取り、それでも尚「そこに一人の女が居る」ことを表現しようとしている。Clarissa はその魂によって「存在」を試される大いなる実験である。この実験は、次作 *To the Lighthouse* で更に発展してゆくものではあるが、1925年の時点で Woolf が Clarissa という女を産み出したことは確かである。“For there she was.” という表現は、控え目な、しかししたたかな、“Yes.” にも劣らぬ肯定的な一人の女の存在宣言といえよう。⁴⁹

註

- (1) 1920年9月26日(日)付。ヴァージニア・ウルフ著作集8「ある作家の日記」神谷美恵子訳、みすず書房、1976年 p. 39。以下、「日記」からの引用は全て同書、同訳を使用。日付、ページ数を文末に記す。
- (2) *Ulysses* 出版経緯の詳細については、シルヴィア・ビーチ著、中山末喜訳「シェイクスピア・アンド・カンパニイ書店」河出書房新社、1974年および小田基著「20年代・パリ」研究社出版、1987年参照。
- (3) 同時代人の中でも Joyce のことを「もし我々が人生そのものを求めるなら、ここにこそ確かにそれはある」といって、*Ulysses* を(部分的にであるにせよ)認める内容の評論を Woolf は行っている。Virginia Woolf, “Modern Fiction”, *The Common Reader 1*, The Hogarth Press, London, 1984, p. 151 参照。
- (4) 「それから……トムが言ったことを思い出す——そのころあれは出版されていた——あの最後の章の巨大な奇跡をなしたとげたあとでいったいだれがふたたび筆をとることができようか、と。」ウルフ、「日記」p. 515。
- (5) 「……それであたしがあのひとに目でもう一回って頼んだらそうそれであのひとはあたしに聞いたのよいいって言うのかいいってぼくの山の花の君ってそれであたしはあのひとのからだに両腕を回してそうあのひとをあたしの上にひき寄せてあたしの胸や香水をみんな感じられるようにしてそうそれであのひとの心臓が狂ったみたいに高鳴っていいわってあたしはいいわってのあたしはもちろんいいわよって。」James Joyce, *Ulysses*, (The Corrected Text, Student Edition), Penguin, England, 1986, p644. 拙訳。下線部は全部“yes”に相当する。最後の「いいわよ」(“Yes”)だけ大文字。
- (6) Virginia Woolf, *Jacob's Room*, The Hogarth Press, London, 1980. p. 176. 拙訳。以下 Woolf の作品からの引用は全て拙訳。
- (7) Woolf が *Mrs. Dalloway* として完成させる作品の為に最初に考えていた題名は、文字通り「時間」(*Hours*)であった。1923年6月19日(火)付「日記」p. 81, 参照。
- (8) Virginia Woolf, *Mrs. Dalloway*, The Hogarth Press, London, 1980. p. 6. 以下、同作品からの引用は全て文中にページ数を記入。
- (9) *Mrs. Dalloway* に於ける時と人物の意識、記憶との関係については David Daiches の図解に詳しい。David Daiches, “Virginia Woolf”, *The Novel and the Modern World*, The Univ. of Chicago Press, Chicago & London, 1973, pp. 203-6 参照。
- (10) *Ulysses* 全18章は各々、文体、手法を異にし、「オデュッセイアー」との対応、色、シンボル等、多様な要素の複合体である為に、複数のレベルでの解説作業が要求される。然るに *Mrs. Dalloway* には言語上の「常道逸脱」的実験は無い。この件については「ヴァージニア・ウルフには『芸術至上主義』といったナンセンスは存在しない」と説く Daiches の批評を参照。*Ibid.* p. 191.
- (11) Woolf, “Modern Fiction”, p. 150.
- (12) ウルフ「日記」, 1923年10月15日(月)付, p. 87. 参照。
- (13) 「……無限に次から次へと収められている鋼鉄でできた巨大な一組の入れ子箱のように、街はうなり声を上げていた…」Woolf, “Kew Gardens”, *The Complete Short Stories*, ed. Susan Dick, Fried Grafton Books, London, 1987. p. 127.
- (14) “Fear no more the heat o’ the sun / Nor the furious winter’s rages”, Shakespeare, *Cymbeline* 258. この詩句のライフモチーフとしての働きについては評者の議論が絶えない。その解釈については、例えば『もう太陽の熱を怖れるな』という詞は死との遭遇に清明な雰囲気なげかける。死に向かって、この作品全体は進んでゆくのである。というのも、Clarissa と Septimus との主要な結びつきは、言うまでもなく、彼の死が彼女にも自分の死に立ち向う勇気を与えてくれることになるのだから」という意見が代表的なものであろう。Hermione Lee, *The Novels of Virginia Woolf*. Methuen & Co. Ltd., London, 1977. p. 110. 参照。上記引用は拙訳。

- (15) Molly Bloom の評価をめぐるは賛否両論があり（言うまでもなく、*Ulysses* 全体の評価と同様）、改めて論ずる必要がある。当稿に於ては結論の “Yes” の肯定的響きをそのままに受容する立場をとる。また、Molly Bloom の解釈については、小野恭子著、『Joyce と〈女性〉』（“Joyce and Woman”）、「英文学研究」、第58巻第二号、日本英文学会、1981年12月 pp. 155-168. から多くの示唆を受けたことを記す。
- (16) Woolf と Joyce を「モダニスト」の地平に並置して比較する論議は、フェミニズムの立場からもなされている。Suzette A. Henke は「Virginia Woolf は James Joyce を軽蔑していたのだろうか、それとも彼の『意識の流れの手法』を真似しようとしたのだろうか。彼女は自分と同じ年に生まれたアイルランド人の『労働社階級』の男に憧憬の念を抱いたろうか。ライヴァル意識を感じたろうか。それとも芸術上の同志を見出したろうか。Joyce の早すぎる死亡のニュースに接した時、Woolf は Clarissa Dalloway が Bradshaw から Septimus Smith の自殺の知らせを受けた時と同様のショックを受けたはずである。1941年1月15日の日記に Woolf は『そして Joyce は死んでしまった。私より2週間若い Joyce が。』（334）と書いた。彼女は常に Joyce を自分にとって一種の芸術上の『別人格』と、心理主義的リアリズムの為のモダニスト闘争に於ける男性同志と見なしていた。実人生に於て、Joyce は Septimus Smith が Clarissa Dalloway に対して演じた役回りを引き受けたことになる。あたかも彼女の物語の鏡の像のように、Joyce の突然で無意味な死の直後に、Woolf は彼女の別人格を追いかけて墓の中に消えたのである」と書いて、Joyce と Woolf 緊密な結びつきを示唆している。Woolf が Joyce の作品を意識して創作したことは明らかである。Suzette A. Henke, “Virginia Woolf Reads James Joyce : The *Ulysses* Notebook”, *James Joyce ; The Centennial Symposium*, eds. Morris Beja, Philip Hering, et al., Univ. of Illinois Press, Chicago, 1986. p. 41. 参照。上記引用文は拙訳。